

「台湾の進化するスマート農業、新農業のいま！」

歐 元韻

スマート農業については以前、一度取り上げたことがあります。今回は、業界関係者の間では重要な「フード台北国際食品見本市」と「台湾美食展」の二大展示会を通じて、新農業とあわせて再度取り上げたいと思う出会いがありました。なかでも特に印象に残ったのは、日本のお米を台湾に輸入する専門商社の社長やガチョウの繁殖業を営んでいらっしゃる二代目経営者との交流です。

＜台湾の進化するスマート農業＞

日本のお米の輸入専門商社の社長は、台湾の政府系産業研究機関にも所属されている方で、日本と台湾のお米に精通されたスペシャリストです。この社長が話されていた内容の中で特に印象的だったのは、「まず、これはあくまでも私個人の見解ですが」と慎重に断りを入れられながらも、「現在の台湾のスマート農業、特にハイテク技術やネットワークを駆使した農作物の生産、栽培、収穫管理体制は、ひょっとしたら日本よりも進化している部分があるのではないか」と感じていることでした。

もともと台湾のドローン技術は世界でもトップクラスにあり、農業への応用はスマート農業分野での起爆剤として一躍脚光を浴びる存在となりました。そのほかにも、2019年7月号のレポートにて紹介しました、台湾南部のパイナップル農園で採用されたことで有名となった農業用観測分析システム(中国語名：阿龜微氣候/ Agri-Weather)ですが、もともとの温度、相対湿度、電解質に関するデータがモニター表示される農場土壌観測センサー、収縮式撮影機、気象観測所の設置に加え、こうしたデータに基づいて判断される灌漑(かんがい)や農薬散布のタイミングを遠隔コントロールにて操作可能とするなど、そのシステムも日々進化しています。またシステム開発業者も、各農場ごとの環境の違いを考慮し、スマート農業システムのカスタマイズを可能としています。こうした台湾のスマート農業技術は、パイナップル以外の主要な外国向け輸出農産物である枝豆、茶葉、レタスなどの栽培にも活用されています。また現在の台湾でのスマートフォン依存度、普及率は世界有数、アジアではトップクラスを誇り、農家がスマートフォンに表示されるデータに基づいてその対応を判断出来るので、各作業の効率化にも繋がっています。

＜台湾の次世代後継者が支える新農業＞

ここ数年、台湾でも少子高齢化問題の影響により農業人口の減少が深刻化しています。2022年に台湾政府が発表した内容によりますと、2021年の農業就業人口は約54.2万人、全就業人口に占める割合は4.7%、翌年の2022年では農業就業人口は約53万人、全就業人口に占める割合は4.6%とその減少が徐々に進行しています。

ただし、ここ数年の傾向として、都会に勤務していた農家の二代目や若者たちの中から、都会より地方に移住するUターン・Iターン希望者が見受けられるようになってきています。今回出会った向天歌創新農業股份有限公司(<http://formosagoose.com>)の代表者、蔡英地氏もその一人です。もともと台湾の雲林県にある実家が食肉用ガチョウの繁殖業を営んでいましたが、ご本人は台北市や中国にて会計士や財務の専門家として活躍されていました。しかし、食肉用ガチョウの繁殖業で知られた雲林地方でも後継者不足が深刻な問題となっており、自らガチョウの繁殖業に乗り出すことにした蔡氏がまず手を付けたのが、ガチョウ繁殖場の環境整備及び飼育方法の改革です。また、情報通信技術などを駆使した次世代養殖場では、離れた場所からもスマートフォン一つでガチョウの生育状況を細かく観察できる管理体制を可能としました。従来よりはるかに短縮された労働時間のもと、ライフスタイル重視の生活をアピールポイントにその普及に努めておられます。また、養殖場では太陽光発電システムを採用した余剰電力の販売、ガチョウの排泄物を利用した土壌改善や飼料のトウモロコシの栽培、ECサイトでのガチョウ肉や加工品の個人向け販売など、さまざまな取り組みが各方面から注目を集めています。「将来的には、こうした取り組みを東南アジア諸国に向けても指導していければ」との構想を語ってくれました。



【トウモロコシ畑(向天歌のHPより)】



【食品展の様子】